

令和7年度小学校教科担任制実施報告書(高学年型)

学校名
熊野町立熊野第一小学校

1 学校の概要

(1) 学校の学級数

	通常学級							特別支援学級	合計
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計		
学級数	3	3	3	3	3	3	18	4	22

2 加配教員が専科指導を行う教科及び週当たりの担当授業時数

(1) 第5、6学年の指定教科

指導教科名	指導学年	指導学級数	1学級当たり時数(週)	授業時数(週)	兼務校での実施
理科	5	3	3	9	
理科	6	3	3	9	

授業時数 計 18 (a)

(2) その他

指導教科等名	指導学年	指導学級数	1学級当たり時数(週)	授業時数(週)	兼務校での実施
図画工作科	3	3	1.7	5.1	

授業時数 計 5.1 (b)

授業時数 合計 23.1 (a)+(b)

3 教科担任制推進教員を配置した授業計画

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	外国語	道徳	総合	特別活動
週当たり標準授業時数	5		3	5	3	1.4	1.4	1.6	2.6	2	1	2	1
6年 1組 (担任: A)	A	A	B	C	推進	専科	A	専科	A	B	A	A	A
6年 2組 (担任: B)	A	A	B	C	推進	専科	B	専科	B	B	B	B	B
6年 3組 (担任: C)	A	A	B	C	推進	専科	C	専科	C	B	C	C	C

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	外国語	道徳	総合	特別活動
週当たり標準授業時数	5		2.9	5	3	1.4	1.4	1.7	2.6	2	1	2	1
5年 1組 (担任: D)	D	D	F	E	推進	専科	D	専科	D	F	D	D	D
5年 2組 (担任: E)	D	D	F	E	推進	専科	E	専科	E	F	E	E	E
5年 3組 (担任: F)	D	D	F	E	推進	専科	F	専科	F	F	F	F	F

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	体育	道徳	外国語活動	総合	特別活動
週当たり標準授業時数	7		2	5	2.6	1.7	1.7	3	1	1	2	1
3年 1組 (担任: G)	G	G	G	G	G	専科	推進	G	G	G	G	G
3年 2組 (担任: H)	H	専科	H	H	H	専科	推進	H	H	H	H	H
3年 3組 (担任: I)	I	I	I	I	I	専科	推進	I	I	I	I	I

4 高学年担任が指導を行う教科等及び週当たり授業時数

学年・学級	児童数(人)	担任	担任する学級以外の授業時数(週当たり)				担任する学級の授業時数 (d)	授業時数の合計 (c)+(d)
			指導学年・学級	教科等名	時数	時数計(c)		
5-1	28	D	5-2	国語	4	10	13	23
			5-3	国語	4			
			5-2	書写	1			
			5-3	書写	1			
5-2	28	E	5-1	算数	5	10	13	23
			5-3	算数	5			
5-3	28	F	5-1	社会	2.9	9.8	12.9	22.7
			5-2	外国語	2			
			5-1	社会	2.9			
			5-2	外国語	2			
6-1	28	A	6-2	国語	4	10	13	23
			6-3	国語	1			
			6-2	書写	4			
			6-3	書写	1			
6-2	29	B	6-1	社会	3	10	13	23
			6-3	社会	3			
			6-1	外国語	2			
6-3	28	C	6-1	算数	5	10	13	23
			6-2	算数	5			
			6-3	算数	5			

5 成果と課題

(①授業の質の向上、②多面的な児童理解、③小・中学校の円滑な接続、④教師の負担軽減、⑤その他)

〈効果のあった取組〉	
①	・教科担任制の担当教科をもつことで、教材研究が深まったり、複数学級で同じ授業を繰り返したりした。
②	・生徒指導上の問題の早期発見・早期解決を図るために、学年間で児童に関する情報を密に共有し、連携しながら児童の指導にあたった。
③	・教科担任制により、児童に担任以外の教諭との学習、人間関係づくりの経験を積ませた。
④	・教科担任制における専科教員を、授業準備の負担が大きい理科に配置した。 ・学級担任の総授業時数、空き時間数の差が少なくなるように配慮しながら担当教科を組み合わせた。 ・学年で一つの週案に集約し、教科ごとに色分けすることで、授業を組みやすくした。



〈成果〉	
①	・各教科担任が専門性をもった指導が可能になり、教材研究を深めることができ、授業の質の向上につながった。 ① ・複数回、同じ授業を繰り返すことで児童の反応を予想したり、伝え方を変えたりすることができ、授業改善が進み、授業力の向上につながった。
②	・学級の児童だけではなく学年間で児童を把握することで、統一感をもった生徒指導が可能になった。また生徒指導上の問題が起きて、学年間で相談しながら解決することができ、問題の早期解決につながった。 ② ・学年の教員全員が、学年全てのクラスの授業に入っているため、生徒指導上の問題が起きて、児童の状況を把握でき、一人で抱えこまず、相談しやすくなった。
③	・教科ごとに教員が変わる中学校と同じような状況になることで、児童がそのことに慣れ、中1ギャップが軽減されたと考える。 ③
④	・担当する教科が絞られたことで、教材研究や教材準備の負担が減った。 ④

〈課題〉	
①	・担当していない教科についての教師の指導力が向上しにくい。 ①
②	・生徒指導上の問題で学級指導が必要なときに、担当の授業があると、すぐに対応できない場合がある。 ②
③	・小・中の教員同士で連携する機会が少なく、授業における基本的な心構え等、意見交換などを行うことがあまりできていない。 ③
④	・朝の会終了後に、1時間目の担当教科のクラスへ移動するために、朝の会を早めに終わらせる必要があり、朝の時間が慌ただしくなる。 ④
⑤	・月曜日に2時間続きの理科がある学級は、時数の確保が大変である。 ⑤



〈対策〉	
①	・担当していない教科でも授業力を向上させることができるように、引き続き、校内研修の内容を工夫していく。 ①
②	・生徒指導上の問題があり、すぐに担任が指導できない場合でも、学年の教員が指導できるよう、学年間で児童の情報を密に共有し、連携する時間を確保する。また、児童にも、困ったことがある場合、どの先生にも相談できることを周知する。 ②
③	・基本的な学習の心構えを小・中で連携して取り決め、小学校の段階で身に付けることができるように取り組む。 ③
④	・朝の時間をスムーズにするために、1時間目は可能な限り、学級担任が授業をする。 ④
⑤	・来年度以降、2時間続きの教科は、月曜日に入れないようにする。 ⑤